

(東女医大誌 第40巻 第4号)
(頁 277~ 279 昭和45年4月)

[学 会]

東京女子医科大学学会 第159回例会

日時 昭和45年1月23日(金)午後1時30分より

場所 東京女子医科大学本部講堂

1. 糖尿病患者における歯肉中の PAS 陽性物質について (第1報)

口腔外科 ○山口 正雄・吉田 弘
早稲田正紀・保間 一彦

従来よりわが教室において、糖尿病と歯槽膿漏症との関係について種々な検討を行なつて来たが、今回は歯肉中の糖代謝を探る一つの方法として、すでに全身的に糖代謝の異常をきたしている糖尿病患者において、歯槽膿漏症の治療の目的で切除した歯肉を試料として、生化学的実験研究を行なつた。

切除歯肉はアセトンならびにエタノールにより脱脂、乾燥し、細末にしたものより、5%トリクロール酢酸、ついでpH 7.4 Tris-KCl 緩衝液を用い抽出した。

抽出物について、濾紙クロマトグラフィーにより検索を試みた結果、抽出多糖類の1部が結合組織のPAS陽性成分より由来していることが示唆され、また抽出した多糖類の構成糖についても2, 3の知見を得たのでこれを報告した。

2. 最近6カ月間の当教室外来における白癬について

(皮膚科) 松田 紘枝

本学皮膚科学教室において最近6カ月間の白癬患者に関する研究ならびに調査の概要を紹介する。これらは、いずれも当科を訪れた患者のうち、白癬症の疑われるものに対して直接鏡検によつて白癬菌を実証したのち、その培養検査によつて菌学的に同定を行なつたものである。わが国においても、かつてはおびただしい数の新菌種や新変種が後を追うように出現したことが文献よりうかがえるが、当科における短期間の調査成績によつては、ごく限られた菌種のみを同定するに至つた。

3. 癌性変化を来した慢性骨髓炎の1例

(整形外科) ○田中 博子・河井 弘次
(中検病理) 平山 章

化膿性骨髓炎が慢性に経過し、肉芽や瘻孔が長期にわ

たり存在すると稀に悪性腫瘍に変化する事が知られている。今回われわれは約50年経過した慢性骨髓炎の肉芽が扁平上皮癌に変化した症例を経験したのでここに報告をする。

症例、63才、男性、既往歴・家族歴には特記すべき事はない。現病歴は52年前に左胫骨々髓炎に罹患し、その後数回骨搔把術を受けるも時折排膿が認められた。昭和43年排膿が増加し、腐骨が瘻孔よりとび出し、患者自身で腐骨を除去し、ガーゼ交換を行なつていた。その後肉芽が増大し圧痛が出現、また易出血性となつたため、44年6月当科をおとずれた。

現症は、全身状態に特に異常は認められない。局所々見は左下腿胫骨前面のほぼ全長にわたり肉芽形成を認める。肉芽は易出血性で悪臭が強い。肉芽中央より胫骨が露出している。排膿は中等度に認められる。そけいリンパ節の腫大を認めるが、圧痛はなかつた。レ線像にて胫骨全体の骨腐蝕像がみられる。血液一般、血清化学では白血球増多をみる以外は特記すべき事はない。膿より *Alcaligenes faecalis* が証明された。翌日入院し肉芽の試験切除を行なつたところ、細胞の異形は強くないが、肉芽のすべてが扁平上皮癌に変化していた。早速大腿中下1/3より切断術を行ない、5カ月経過した現在、仮義足にて歩行訓練を行なつている。肺その他の臓器への転移は認められない。

慢性骨髓炎の癌性変化は1847年 Ditttrich により報告されたのがはじめてで、その発生要因は、持続性の炎症と炎症物質の刺激によると考えられている。発生頻度は Sedlin らによれば慢性骨髓炎の全経過中 0.5%、McAnally は0.23%と報告している。本邦では一杉の252例中1例という報告があり、比較的稀なもののようである。当教室にても今回の症例がはじめてであり、文献的考察を加えて報告した。

4. 遺伝性球状赤血球症の3例

(第二病院 小児科)

○杉岡 昌明・富田きぬ子・山崎 トヨ・
森川由紀子・村田 光範・草川 三治

(第二病院 外科)

丸野敏次郎・国吉 昇・坪井 重雄

私達は最近遺伝性球状赤血球症の3例を経験し、その両親についても血液学的検索をする機会を得た。その2例につき脾摘を行ない良好なる結果を得たので、脾摘前後の赤血球寿命など臨床上2、3の知見を得たので、特に小児科臨床上の診断的問題を中心に若干の考察を加えて報告する。

症例1は11才女児、主訴は黄疸、脾腫。症例2は5才女児、主訴は貧血、脾腫、症例3は9才男児、主訴は遷延性急性腎炎に合併した脾腫である。遺伝性球状赤血球症診断のために、Jacob, Young らの基準があるが、それらと本3症例とについて言及する。小児科領域では岩波氏らによると昭和34年までに70数例の報告にすぎないというが、本症は注意すればそれほど珍らしいものではないと考えられるので、その早期診断と、治療上の問題としての脾摘についても述べた。

追加 上田俊男(三神内科) Parpart法による Osmotic Fragility は、私共の研究室で行なっておりますのでご連絡ください。患者およびその家族の Chromosome Aberration の有無を検討しておりますから、症例がありましたらご一報いただけると有りがたく思います。

5. 修正大血管転位症の手術について

(心研外科) 乃木 道男

修正大血管転位症のみ単独では外科治療の対象とはならない。しかし本症には、心室中隔欠損、肺動脈狭窄などを合併することが多く、この合併奇型が手術の対象となる。したがって合併奇型によつて手術方法を選択しなければならない。

短絡手術としては、Blalock-Taussig 吻合手術、Glenn 手術などが行なわれ、肺動脈弁狭窄に対して Brock 手術が、また肺高血圧症の合併に対しては、肺動脈狭窄作製術が行なわれるが、これら非開心術は、特に問題はないようである。

開心術を行なう場合、本症には、冠動脈の走行異常、刺激伝導系の異常を伴うため、術中、術後に合併症をおこす頻度も高く、A-V Block などで死亡する例もある。

一般に、心室切開は、右側心室(解剖学的左心室)を切開する例が多いが、右側心室表面には、左冠動脈の回旋枝および前室間枝が走っており、切開範囲を著しく制限される。

このため、左側心室(解剖学的右心室)切開が有利な例もあり、症例によっては、心室中隔の変形がつよく、右側心室切開では、心室中隔欠損の修復不可能と考えられる症例もあつた。

6. いわゆる SMON 病に相当する脊髄および視神経病変を示した2剖検例について

(第2病理)

○梶田 昭・三沢 章吾・益子 幸子

SMON病は、その特異にして難治な病態のために、にわかに注目を集めつつある疾患である。ここに報告するのは、主として脊髄に、SMON病に相当する病変が顕著であつた剖検例であつて、いずれも生前において、腹部症状の前駆、特有な神経症状によつてSMON病の疑いが濃厚であつたものである。

第1例(S N3683)は、51才の女性、剖検上、臨床診断と一致して、直腸癌とその肝転移が認められた他、視神経および脊髄の後・側・前索に系統的な脱髄が見られた。

第2例(S N3731)は、53才の女性、僧帽弁狭窄に対して交連切開術が施行された例であつて、脊髄の主として後・側索に系統的な脱髄が認められた。

両例に共通して、後索知覚路の変性は頸髄に強く、側索錐体路の変化は腰髄に強い。すなわち、長いノイロンの遠位部に変化が強いことが特徴であつて、これは従来に記載に一致している。脊髄が、単に変性ノイロンの集合ではありえず、組織として崩かいせざるをえないことに、本病変の非可逆性の一因が求められないであろうか。

7. 〔症例検討会〕(2:30~4:00)

解離性動脈瘤症例

司会 榊原 仟教授

追つて本誌に全文を掲載する。

8. 〔綜説〕

術前照射について

(放射線科) 田崎 瑛生

現在の癌の根治的治療の手段として、手術的治療と放射線治療が、種々の臓器と腫瘍の種類により、それぞれの立場から、一応の成果を挙げているかに見えるが、根治率の点から、癌の治療医達は、焦燥の感に心密かに悩んでいるにちがいない。そして、それぞれの根治的手段としての手術と放射線を組合わせ、高い治癒率を期待しようとする。その期待は、手術と放射線の組合わせ方の一つとして、手術前に照射を行ない、1)局所的に切除不能の癌を切除可能にすること、2)照射により癌細